

高等学校の部

最優秀賞 [大分県教育の日推進会議会長賞]

「ふるさと」のバトン

大分県立宇佐産業科学高等学校 3年

てら した こう た ろ う
寺 下 幸太朗

私の「ふるさと」宇佐市は、自然と人とが共生する、物心ともに豊かな土地である。

宇佐市といえば、昔からの賑わいを見せる四日市商店街や宇佐神宮などを思い浮かべることが多いのではないだろうか。しかし、私にとっての宇佐市は、国道10号線より南側の山間部のイメージの方が強い。私が月に数回サイクリングで訪れる場所は、山間部ながらよく整備されている。もちろん所々は荒地もあるが、人の手が入っている田畑が意外と多いもので、道路脇も、また景観の良い高台も草が刈られており、とてもスッキリした感がある。

これは地域の人々が、美しい「ふるさと」を守ろうと行動しているからであろう。「自分たちの『ふるさと』は自分たちの手で守る」という思いがひしひしと伝わってくる。

私がこれまで話を聞いた地域の方々には、そういった点で強固な信念を持っている方が多かった。中でも地域の中心人物として特に強く印象に残っている方が2人いる。宇佐市麻生のFさんと、院内町「両合棚田」のIさんだ。地域のリーダーとしての2人と、2人が守る自然環境と伝統文化こそが、私の中での「ふるさと」であり、私がそれらの景観を眺めるのみならず、2人を通して初めて「ふるさと」とつながることができた実感している。

そもそも私がなぜ前述の2人と親交を結ぶに至ったか、そして、なぜ2人についてエッセーを書くと考えたのか。これには深い理由と、人と人とのつながり、感銘を受けた出来事とが関係している。

まず、麻生地区のFさん。伊呂波川沿いの谷、上麻生からは奇岩を頂く仙岩山が遠望される。麓にはのどかな田園地帯が広がり、昔ながらの集落が今なお残る。道なりに少し歩けば、麻生神社や桜の名所、麻生の山並みが一望できる大パノラマと、大いに魅力に溢れている。その麻生で、私はFさんと「再会」した。というのも、Fさんは私の小学校時代の教頭先生であり、高校生となった私が麻生へサイクリングに出かけた際、偶々出会った地域の方からFさんがこの地区にお住まいであることを聞き、これも縁だ感じて思い切ってFさん宅を訪れてみた。それで数年ぶりの「再会」を果たすことができたのだ。

突然の訪問にもかかわらず、Fさんは快く出迎えてくれ、色々な話をしてくれた。その話には私は大いに感銘を受けた。一番は、Fさんが地域での生活を楽しんでいることだ。退職後、寺の住職を務める傍ら、積極的に新しいこと、特に農業に挑戦し、今では地域の先頭に立って活躍している。そんなFさんの姿に魂を揺さぶられた。ただ感銘を受けただけではなく、自分もFさんのような田舎暮らしを楽しめる人間になりたいと考えたのである。

次に出会ったのがIさんだ。Iさんの暮らす院内町「両合棚田」は、数百年前から続く石垣が棚田独特の美しい景観を生み出している。棚田の下から見上げる景色、上段から眼下に臨む石垣の群れは圧巻であり、その石垣を守っているのがIさんである。高校と地域とが連携する取組で出会ったIさんに、もっと詳しく話を聞いてみたいと思った私は、休日にペダルをこいで棚田まで行ったことがある。訪問すると、ここでも快く私を出迎えてくれ、奥様も交えて約2時間もの間、棚田の今昔や保全、団子汁秘話など様々な話を聞かせてくれた。地域を愛し、地域に尽くし、後世に棚田や昔の暮らしを残そうと奮闘するIさんの姿は、今でも強く印象に残っている。

この2人との出会いは、私の人生設計の指針となった。田舎暮らしの楽しさや地域を守る思い。これらは、麻生・両合の美しい景色とともに私の心に深く刻まれている。地域を力強く牽引する人物の考え方も知れた。そして、多くを望まず、されど知恵と工夫で生きることを楽しむ態度を学んだ。そんな生活を私も「ふるさと」でしてみたいと思ったのだ。

「あんたのような人に地域を引っ張ってほしい」と、Iさんに真顔で言われたことがある。その言葉を後ろ盾に、2人の思いを「ふるさと」につないでいくことを決意した今年の夏が終わる。